

I
ことばの力を育てる

sample

sample

心をはぐくむ語りかけ

単語だけの会話に気をつけて

みなさんは、家族に食事のしたくができたことを伝えるとき、どんな言葉を使いますか？「ごはんよ」でしょうか。それとも、「ごはんができたから、席についてね。温かいうちに食べましょう」でしょうか。このふたつの表現の大きな違いは、前者が単語だけであるのに対し、後者は長い文になっているということです。

もちろん、どちらでも言いたいことは伝わります。でも、みなさんは単語だけで成り立つ会話を美しく豊かなものだと感じるでしょうか。

単語だけで済ます人を「タンゴ族」などと呼びますが、親子、家族の会話は、案外、この「タンゴ族」になりがちです。それには、家族が気のおけない存在であることや日常の慌ただしさも影響しているでしょう。また、子どもが単語で話すために、自然とそれに合わせてしまう場合もあります。でも、言葉に関しては、子どもに合わせるべきではないでしょう。子どもは言葉をつなげる術を知ら

ないから単語だけで話すのであって、その方法を教えるのはまわりの大人、つまり家族なのです。子どもは、おうちのかたの丁寧な語りかけを通して、正しい文法や豊かな表現方法を学習していきます。就学以降の国語教育も、幼児期に身につけた言語習慣のうえに成り立ちます。子どもの話す言葉に注目する前に、まず、おうちのかたの語りかけを振り返ってみてください。それが、子どもを「正しく、美しい日本語の話せる人」に成長させる、第一歩になります。

自分で言葉を選ぶ力

小さな子どもが初めて言葉を発するときには、本当にうれしいものです。言葉の数も日に日に増え、その度に「こんな言葉も覚えたのね」と思いますね。

子どもが言葉を覚えるとき、それはその言葉の指すものが「分かった」ときです。そして、「分かった」は、「分けられた」ということなのです。例えば花を見て「おはな」と言えるのは、花を草や木や地面と区別できているからですし、「おかゆ」と言えれば、「ごはん」とは違うものとして分けられているのです。これは物の名前に限ったことではなく、どんな言葉でも同じです。

言葉を分けるということは、言葉の選択肢を増やすということです。自分の思いを伝えたいとき、物事を正確に言葉にしたいときに、最も適当な言葉を選べる力は、会話力や文章力そのものです。言葉を選ぶ力のある子どもに育てるために、おうちのかたも、さまざまな物事を分けてあげる気持ち

ちで語りかけてみてください。

難しく説明する必要はありません。ただ、子どもの成長に合わせて、おうちのかたがいろいろな言葉を使ってあげればよいのです。そうすれば、次第に「走る」と「歩く」が分かれ、「悲しい」と「悔しい」が分かります。「花」が分かったら「梅」や「桜」を分け、「青」が分かったら「水色」や「紫」を分けてあげる。教える言葉はいくらでもあります。おうちのかたがこうした意識をもち続けていれば、子どもの言葉を選ぶ力はどんどん伸びていくでしょう。

会話の距離感

「子どもには、きちんとした敬語が話せるようになってもらいたい」。そんな声をよく耳にします。しかし、敬語を含め、言葉にはそれにふさわしい「時と場合」があります。人と会話するときに必要なのは、まず、この場面を知ること、そして相手との距離を意識することです。

例えば「あなた」「きみ」「おまえ」では同じ人を指しても全然違います。初対面なら、なれなれしくするよりも、丁寧に話した方が安心できます。でも、親しくなったら、「きみ」「おまえ」と呼び合いたくなり、そうすることでさらに気持ちを通じ合う場合もあります。それは単なる言葉遣いの問題ではなく、人との付き合い方の姿勢です。そして、その最初のお手本になるのが、おうちのかたなのです。

直接語りかけるときだけでなく、別の相手と会話しているときも、子どもはおうちのかたの言葉を吸収しています。近所の行き慣れたお店で買い物をするときは、「ちょうだい」「ありがとう」と言っている人でも、親子でお店屋さんごっこをするとき、「〇〇をください」「ありがとうごさいます」と自然と敬語になったりします。

こんなふうには、おうちのかたが場面や相手との距離を意識しながら話すことで、子どもにも距離感と言葉の関係を自然に学ばせてあげてください。そうすれば「きちんとした敬語を」などと難しく考えなくても、子どもは自然に相手に気持ちのいい言葉で会話ができるようになっていきます。